

## 第1 国民の健康状態

### 1 寿命

一国の健康水準の集約的指標の一つとされている死亡率は戦後著しく改善され、昭和22年の人口1,000対14.6から33年には7.4とほぼ半減した。しかし、その後は成人病の増加や交通事故の激増等のため、死亡率は横ばいを続けている。わが国の死亡率を西欧諸国と比べると、第1-1表のとおり粗死亡率では低い、これはわが国の方が老令人口の割合が少ないためであり、年令階級別に比較すると、わが国の死亡率はまだ西欧諸国より高く、年令構成を考慮した訂正死亡率も他の諸国を上まわっている。乳児死亡率の戦後における改善は総死亡率より著しく、22年の76.7(出生1,000対)から37年には26.4と約1/3に低下したが、世界でも最低のオランダ15.4、スエーデン15.5(いずれも1961年)と比べるとなお高く、今後改善の余地が残されているといわねばならない。

第1-1表 年令別死亡率(人口1,000対)の国際比較

第1-1表 年令別死亡率(人口1,000対)の国際比較

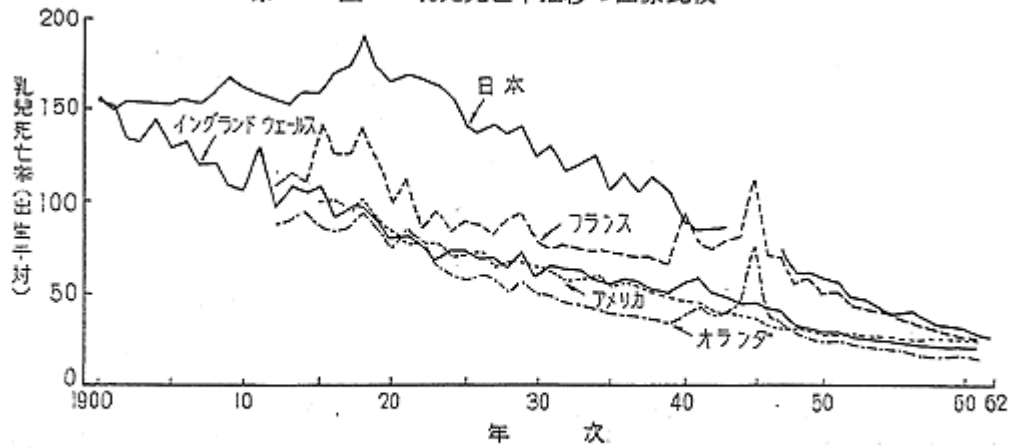
	日 (1962年)			西 ド イ ツ (1960)			イ ン グ ラ ン ド ・ ウ ェ ー ル ズ (1961)			フ ラ ン ス (1961)			ス エ ー デ ン (1960)		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
全 年 齢 (訂正死亡率)	7.5 (6.9)	8.1	6.8	11.4 (6.4)	12.5	10.3	11.9 (5.5)	12.5	11.4	10.9 (5.5)	11.5	10.3	10.0	10.5	9.4
40~44才	3.3	3.9	2.7	2.8	3.4	2.3	2.6	3.0	2.2	3.1	4.1	2.1	2.1	2.5	1.7
45~49	5.0	6.0	4.1	4.5	5.5	3.7	4.3	4.8	3.5	5.0	6.8	3.5	3.6	4.0	3.1
50~54	7.9	9.7	6.3	7.2	9.5	5.3	7.3	9.3	5.4	7.6	10.0	5.0	5.4	6.2	4.5
55~59	12.8	16.0	9.6	12.0	16.3	8.3	12.3	16.8	8.1	11.7	16.4	7.3	9.1	11.3	6.9
60~64	20.1	25.6	14.8	19.6	26.9	14.0	20.3	28.6	13.7	17.6	24.7	11.5	14.9	18.4	11.6

資料：厚生省統計調査部「人口動態統計」及びUN「Demographic Year Book (1961)」

(注) かつこ内の数字は昭和10年の日本人口総人口を基準とした訂正死亡率(1960年)である。

第1-1図 乳児死亡率推移の国際比較

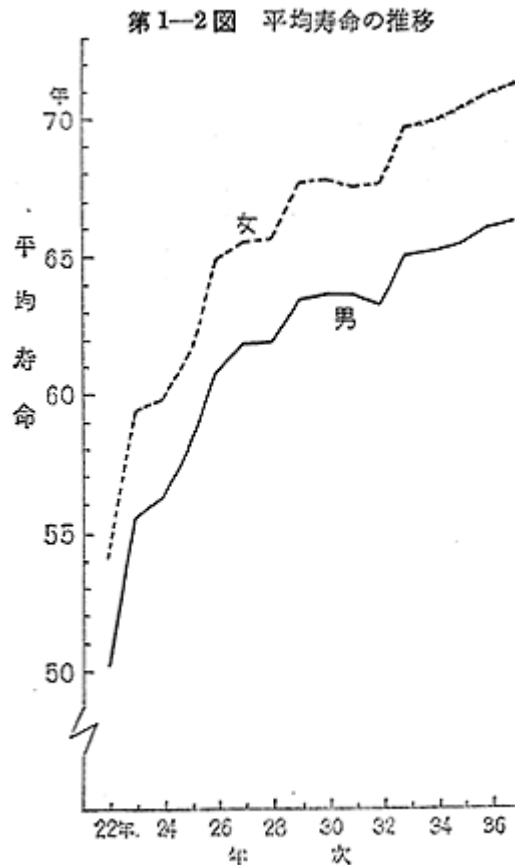
第1-1図 乳児死亡率推移の国際比較



資料：UN「Demographic Year book (1961)」  
日本は、厚生省統計調査部「人口動態統計」

次に、生れたばかりの赤ん坊が平均して何才まで生きのびることが期待できるか、すなわち平均寿命についてみると37年には男子66.2才、女子71.2才であり、16年前の22年には男子50.1才、女子54.0才であつたのに比べると、それぞれ16.1年及び17.2年と急速な延長をみている。明治、大正を経て昭和の初期にいたる間の平均寿命は、40年をやや上まわる程度であつたものが、戦後にいたつて、いわゆる寿命革命を経験した。しかし、前述のごとき死亡率の停滞を反映して、最近における平均寿命の延長の速度は、従前に比べて鈍化しており、たとえば男の平均寿命は22年から29年までの8年間に13.3年伸びたのに対して、29年から37年までの8年間の伸びは2.8年にすぎない。

第1-2図 平均寿命の推移



資料：厚生省統計調査部調べ

第1-2表 最近の平均寿命の国際比較

第1—2表 最近の平均寿命の国際比較

		男	女
カナダ	1955~57	67.6	72.9
アメリカ(白人)	1959	67.3	73.9
アメリカ(その他)	1959	60.9	66.2
チェリ	1952	49.8	53.9
セイロン	1954	60.3	59.4
インド	1957~58	45.2	46.6
イスラエル	1961	70.5	73.6
日本	1962	66.2	71.2
フィリピン	1946~49	48.8	53.4
オーストリア	1949~51	61.9	67.0
デンマーク	1956~60	70.4	73.8
フィンランド	1951~55	63.4	69.8
フランス	1961	67.6	74.5
東ドイツ	1956~57	66.3	71.0
西ドイツ	1958~59	66.7	71.7
ハンガリー	1958	55.1	69.4
イタリア	1954~57	65.8	70.0
オランダ	1956~60	71.4	74.8
ノルウェー	1951~55	71.1	74.7
ポーランド	1960~61	64.8	70.5
スペイン	1950	58.8	63.5
スエーデン	1960	71.2	74.9
スイス	1948~53	66.4	70.6
イングランド・ウェールズ	1961	68.0	73.8
ユーゴスラビア	1958~59	61.6	64.4
オーストラリア	1953~55	67.1	72.8
ニュージーランド	1955~57	68.2	73.0
ソ連	1958~59	64.4	71.6

資料：UN「Demographic Year Book (1962)」

日本は、厚生省統計調査部調べ

## 第1 国民の健康状態

### 2 栄養と体位

栄養がよくなれば体位が向上し、また体位を維持し発展させるには栄養の良否が大きな関係を持つている。戦後食糧事情の回復につれて日本人の食生活及び栄養状態の改善は顕著なものがあり、昭和37年度の国民栄養調査成績からみても前年度に比較して動物性蛋白質、脂肪、ビタミン等重要な栄養素の摂取は増加し、また食品群別には油脂類、動物性食品等の摂取増は著しく、特に乳、卵、肉類は最近数年間において最も大幅な伸びを示した。しかし、緑黄色野菜や果実については支出額が前年よりふえたにもかかわらず摂取が停滞又は減少しており、これには物価の影響も反映しているものと思われる。

第1-3表 業態別にみた栄養摂取量

第1—3表 業態別にみた栄養摂取量(1人1日当り)  
(37年)

	摂 取 量			対 前 年 比 (%)		
	生 産 者 帯 世 帯	消 費 者 帯 世 帯	そ の 他 帯 世 帯	生 産 者 帯 世 帯	消 費 者 帯 世 帯	そ の 他 帯 世 帯
熱 量 Cal	2,186	2,026	2,093	(-) 1.1	(-) 0.5	(+) 1.1
蛋白質 { 総 量 g	69.0	71.2	70.2	(+) 0.6	(+) 1.0	(+) 0.4
	動物性 g	22.5	29.8	25.9	(+) 9.2	(+) 4.2
脂 肪 g	24.5	30.5	23.8	(+) 7.9	(+) 6.6	(-) 2.5
カルシウム mg	387	410	405	(+) 1.3	(+) 2.2	(+) 1.2
ビタミン A I.U.	1,204	1,409	1,081	(+) 12.4	(+) 5.9	(-) 1.7
ビタミン B <sub>1</sub> mg	1.03	1.15	1.03	0	(+) 9.5	(-) 1.0
ビタミン B <sub>2</sub> mg	0.72	0.80	0.73	(+) 4.3	(+) 3.9	(-) 4.1
ビタミン C mg	76	75	68	(-) 1.3	0	(+) 8.8

資料：厚生省公衆衛生局「国民栄養調査」

第1-4表 業態別食品摂取状況

第1-4表 業態別食品摂取状況(1人1日当り)

	37年(g)			対前年比(%)		
	生産者帯 世帯	消費者帯 世帯	その他 世帯	生産者帯 世帯	消費者帯 世帯	その他 世帯
米	393.2	330.2	367.4	-1.6	-3.0	9.1
小麦	25.0	8.8	30.5	-31.5	-20.7	-26.0
大麦	52.4	77.6	55.0	6.5	4.9	-3.2
甘藷	16.4	7.8	13.6	-28.7	-9.3	-53.1
馬鈴薯	28.4	22.7	25.6	-9.0	-9.6	-39.6
砂糖類	14.1	13.1	13.3	6.0	4.0	11.3
油脂類	6.4	8.3	5.3	14.3	13.7	-11.7
味噌	30.3	23.0	26.2	0.3	-0.9	-1.9
大豆製品	29.3	43.0	37.7	-0.4	6.7	2.7
魚介類	68.9	77.2	76.8	4.6	-1.8	-8.7
獣肉類	15.4	34.6	19.8	49.5	17.7	58.4
卵類	20.6	31.6	23.2	32.9	12.5	28.9
乳製品	25.8	50.9	27.0	7.5	14.1	38.5
緑黄色野菜	46.4	34.7	39.4	-0.9	-0.6	-9.4
柑橘類・トマト	17.5	33.3	19.1	27.7	10.3	35.5
その他の果実類	48.3	54.7	52.0	-23.9	-10.9	12.8
その他の野菜類	135.1	113.8	119.3	1.5	4.5	-8.3

資料：厚生省公衆衛生局「国民栄養調査」

次に栄養状態の良否の端的な表現である体位についてみると、成長期の児童の身長、体重はいずれも顕著な伸長を示している。たとえば14才の男子の身長の推移はこの16年間に12.2cm、女子でも7.2cmと大幅に伸び、また体重についても男子7.6kg、女子5.4kgの増加が見られる。しかも、今後当分の間はこの傾向が持続し、日本人がますます大型化するであろうことが予測されている。このような体位の向上に対応して栄養審議会では38年1月に45年を目途とした栄養基準量及び食糧構成基準を策定した。これは45年までに到達するであろう国民の体位を予想し、その体位の向上に見合う必要な栄養量と、この栄養量をどのような食品からとるべきであるかという食糧の構成を定めたものである。しかもその狙いは、現在の国民の食生活が穀類に偏重し、動物性蛋白質や脂質の摂取が不足しているという栄養のアンバランスを是正するため穀類カロリー-の総カロリー-に対する割合を現在の約70%から60%に引き下げること、及び動物性蛋白質の摂取割合を増加させ、動物性蛋白質の総蛋白質に占める割合を約35%から40%までに引き上げることの二つを大きな柱としている。しかし、全体的にみると都市と農村との間にはなお格差があり、国民平均からみると農村にはなおかなりの遅れがあることは否定できない。

第1-5表 栄養摂取量と基準量との比較

第1-5表 栄養摂取量と基準量との比較(1人1日当り)

	32年	33	34	35	36	37	45(目標)
熱量 Cal	2,089	2,118	2,117	2,096	2,106	2,080	2,300
蛋白質 g	69.6	70.1	69.3	69.7	69.7	70.4	75
動物性蛋白質 %	33.3	34.0	33.9	35.4	36.2	38.8	39.9
総蛋白質							
脂防 g	21.9	23.7	23.8	24.7	26.1	28.3	38
カルシウム mg	38.4	38.8	38.5	38.9	39.3	40.2	660
ビタミン A I.U.	1,253	1,240	1,225	1,180	1,228	1,327	1,900
B <sub>1</sub> mg	1.09	1.07	1.05	1.05	1.04	1.10	1.2
B <sub>2</sub> mg	0.71	0.73	0.74	0.72	0.73	0.77	1.2
C mg	77	77	78	75	76	75	63

資料：厚生省公衆衛生局「国民栄養調査」

第1-6表 食品群別摂取量と食糧構成基準との比較

第1-6表 食品群別摂取量と食糧構成基準との比較(1人1日当り) (単位: g)

	32年	33	34	35	36	37	45年を目途とした食糧構成基準
穀類	434.1	439.4	441.0	431.2	428.3	412.8	400
いも類	78.0	71.1	62.6	60.2	59.7	48.2	65
砂糖							
砂糖加工品に含まれるもの	10.2 (15.3)	12.0 (18.0)	12.3 (18.5)	12.2 (18.3)	12.6 (18.9)	33.0	50
油							
油加工品に含まれるもの	4.9 (2.1)	5.9 (2.5)	5.9 (2.5)	6.1 (2.6)	6.6 (2.8)	10.7	17
大豆	21.9	21.3	20.7	20.7	20.4	19.8	25
その他の豆	6.1	6.6	5.1	6.1	5.6	4.6	5
魚介(なま)	92.6	90.0	85.8	90.0	86.8	85.4	85
肉	14.9	17.8	18.3	18.8	20.7	27.4	25
卵	13.4	15.0	16.5	19.7	23.6	27.6	35
乳	26.7	36.7	40.0	46.7	50.0	60.1	140
緑黄色野菜	48.5	45.2	41.8	38.5	36.4	34.4	100
その他の野菜	191.3	197.4	205.2	193.0	189.6	185.1	150
果実	66.4	79.2	79.4	78.6	88.1	84.4	200

資料: 厚生省公衆衛生局「国民栄養調査」

## 第1 国民の健康状態

### 3 死亡とり病

---

戦後疾病構造及び死因構造に重大な変化が起り、伝染性疾患から非伝染性慢性疾患に重点が移行したことはしばしば指摘されるところである。

まず死亡については、前述のとおり国民の総死亡率は昭和22年から37年にいたる15年間にほぼ半減しているが、これは主として細菌感染性疾患の減少によるものであり、さらにその中でも中心的役割を果たしたのは結核と赤痢を中心とする伝染病の減少であった。すなわち、細菌感染性疾患については著しく減少し、22年に比し37年には結核死亡率1/6以下に、赤痢死亡率は1/10以下に減少しているが、他方、脳卒中、がん、心臓病等の成人病の死亡率は22年の336.8(人口10万対)から37年には430.0と増加の傾向にあり、37年の国民総死亡数の57.6%を占めるにいたっている。また自動車事故による死亡数は、年々増加し、25年から37年までの間に4倍以上に達している。

次に、り患の状況については、急性伝染病及び結核を除いては資料に乏しかったが、28年頃から疾病一般のり患統計が整備されはじめ、死亡のみならず国民の傷病量が把握できるようになった(国民健康調査)。これによると国民の傷病り患率等は漸増傾向を示している。この事実は、潜在医療需要の顕在化、結核、赤痢等のり患率の低下傾向が緩慢であること、中高年令層の増加に伴って慢性疾患が多くなったこと、社会生活の複雑化に伴って精神障害が増加したこと、道路交通の激化、鉄道交通の過密化等に伴って交通事故がふえたこと、工業化の進展によつて大気汚染等の公害が増大しつつあること等各種の面から検討が加えられるべきであろう。

---